

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 1 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370299

研究課題名(和文) イギリス・ロマン主義文学における公共圏 友愛共同体と印刷文化

研究課題名(英文) The Public Sphere in English Romantic Literature: Fraternal Community and Print Culture

研究代表者

藤巻 明 (FUJIMAKI, Akira)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：30238604

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：フランス革命の自由、平等、友愛の理想に影響を受け、サミュエル・テイラー・コールリッジ、ウィリアム・ワーズワス、チャールズ・ラムなどロマン主義第一世代の若者たちは、友愛共同体の構築を目指したが革命同様挫折した。まず、その実態と意義を、書簡を含む作家たちの作品を精読し最新の研究を参照することによって明らかにした。その上で、友愛共同体を出て、印刷文化というより広い公共圏に身を投じ、作家としてそれぞれが自立した後、共同体の友愛精神がどのように受け継がれ変容し、その後も影響を与え続けたのかを、『エリア随筆』を『ロンドン雑誌』連載後書籍に纏め、印刷文化と最も関わりの深かったラムに焦点を合わせて検証した。

研究成果の概要(英文)：Following the ideals of the French Revolution, liberty, equality and fraternity, the first generation of young English Romantics such as Samuel Taylor Coleridge, William Wordsworth and Charles Lamb tried to establish a fraternal community but failed like the revolution itself. First, by reading closely their works, including letters, and referring to latest previous research, I tried to clarify how the collapse happened and what significance their trial and error had. After leaving the failed community and entering the wider Public Sphere like print culture, they more or less succeeded in establishing themselves as Romantic writers. Then, I investigated how the fraternal spirit of that community was inherited and transformed, influencing them afterwards, by focusing on Lamb, who was most closely connected with the print culture then, through his so-called Essays of Elia, first contributed to the popular London Magazine from 1820 to 1825, then published in books in 1823 and 1833.

研究分野：人文学、文学、英米・英語圏文学

キーワード：イギリス・ロマン主義文学 公共圏 印刷文化 友愛共同体 作品生成過程

1. 研究開始当初の背景

(1) この研究の着想に至った動機は、過去二度に渡る科研費研究「定期刊行物への寄稿によるイギリス・ロマン主義文学の自己形成と世論形成」(2003-2004年度)及び、「イギリス・ロマン主義文学作品の生成過程と正典化についての実証的研究」(2010-2012年度)で、定期刊行物を通じたロマン主義作家たちの自己形成と世論形成、さらには、作品のその後の正典化過程を跡づけてその問題点を探ったことに発している。これまでは、自己形成にせよ、作品生成にせよ、それぞれの作家の個人的な営為として捉えてきたが、この研究を続けるうちに、ロマン主義作家たちの若年に見られる友愛の共同体という範囲の限定された公共圏への指向を通じた相互交流が作家としての自己確立に大きな影響を与えただけでなく、印刷文化というはるかに大きな公共圏に参入して作家として活躍するに及んでも、作品内における相互引喻、あるいは雑誌媒体への投稿による反応など様々な形で関わりが続いていたことに気づき、個々の作家の孤立した活動としてではなく、相互関係の網の目の中で包括的に文学状況を捉える必要を感じ始めたことが大きな理由である。

(2) 1790年代の印刷文化と公共圏の問題については、もはや古典と呼ぶべき著書 Paul Keen, *The Crisis of Literature in the 1790s: Print Culture and the Public Sphere* (1999) が存在するが、これは当時の文学という制度そのものに目を向けたものであり、作品や作家についての具体的な考察はどちらかと言えば希薄だった。本研究では、文学の制度や枠組みの問題よりも、ロマン主義第一世代に属する作家たちの作品に依拠しながら、友愛の共同体と印刷文化という二つの公共圏の相互関係に目を向けたい。その際に大いに参考になるのは、1790年代のロマン主義作家たちの友情について、チャールズ・ラム (Charles Lamb) を中心に跡づけた Felicity James, *Charles Lamb, Coleridge and Wordsworth: Reading Friendship in the 1790s* (2008) であり、普遍的慈愛の実現を目指したラムが、結局、現実世界ではそれが不可能なことをサミュエル・テイラー・コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge) との友情の一時的破綻などから知り、現実ではなくテキストの中で読者との間に個人から発する慈愛の拡大を見出そうとして印刷文化という広大な公共圏へ漕ぎ出したという指摘は傾聴に値する。しかし、ジェイムズは、友情を原点としてそれをテキストに反映させたラムだけを特権化する一方、コールリッジとウィリアム・ワーズワス (William Wordsworth) の二人については、ともすれば自分勝手な著述至上主義的な孤高の芸術家として扱う傾向がある。

(3) この研究では、そうした先行研究の偏りを修正し、上の三人に十歳以上年下のトマス・ド・クインシー (Thomas De Quincey) を加えて、そのうちの誰をも特権化することなく平等に扱いながら、相互影響の様子を具体的に辿っていきたい。それによって、前回の科研費研究でも行なった作品生成過程はさらに立体的な姿で浮かび上がり、個々の作品が作家個人にとっての意味合いだけでなく、友愛の共同体とその後の作家付き合いの中でどのような意味を持っていたかが明らかになり、作家を個別に見ていた時には捉えられなかった解釈が可能になると思われる。それは、印刷文化と作家の友愛共同体という大小二つの公共圏が相互に関係し合って成立するイギリス・ロマン主義文学のダイナミズムを実感する試みになるはずだ。

2. 研究の目的

(1) コールリッジが1790年代半ばに熱中していたパンティソクラシー (万民同権政体) 運動の挫折の後にそれに代わるものとして、ワーズワスにラムを加えて構築しようとした友愛共同体の実態とその社会的・歴史的意義を、作家たちの残した手紙類と詩やエッセイを精読することを通じて辿り、共同体における相互の影響関係を明らかにする。1800年代後半に遅れてこのグループに参入するド・クインシーについては、先輩作家たちへの偶像崇拜がどのように変容していくかを位置づけることによって、友愛共同体の挫折とその辛辣な反動の側面を浮き彫りにする。

(2) そうした限られた構成員からなる公共圏での活動を見た上で、印刷文化というはるかに大きな公共圏に作家として乗り出した後の作品を精読し、友愛共同体時代の影響の残滓やそれへの反発がどのような形で表われているかを考察する。コールリッジについては18世紀末から19世紀の初めにかけて集中している代表作と当時盛んに *Morning Post* 紙へ投稿していた詩、ラムについては1820年に雑誌連載の始まるエリア随筆、ド・クインシーについては1834年にコールリッジが他界したのをきっかけとして雑誌に連載を始めた湖畔詩人の回想録など、定期刊行物を発表媒体としたものを中心として考察を行なう。比較的定期刊行物への寄稿が少なかったワーズワスについては、1805年に完成しながら死後 (1850年) まで出版することを禁じて、いわば私圏に長く留め置いた自伝的叙事詩 *The Prelude* を検討することで、雑誌や新聞といった公的媒体にすぐに載せることを前提とした書き物との差異を検討する。

(3) そのような作業を通して、孤立した個人的営為というよりは、ある種の協同作業を通じて作品が生成され、印刷文化という公共圏の中に送り出されて、そこでも作品同士が互いに反響し合う様と、それが当時の社会にも

たらした影響を跡づける。

(4) ロマン主義時代の印刷文化と公共圏という大きな枠組みを論じた著作や、ラムという個人を特権化して友情とその後作品生成の関係を跡づけた研究はあるが、広くロマン主義第一世代の作家たちの友情（及びその後の破綻）と作品や印刷文化との関係を具体的に考察した研究はこれまでになく、両方を兼ね備えた視点からこの時代の作家群像を立体的に浮かび上がらせることによって、フランス革命の自由と平等の理想の挫折の後に登場する作家たちの友愛共同体の意味を探り、印刷文化というより広い公共圏での活動に移った時にそうした共同体時代の友情がどのように受け継がれ、また失われるのかを検証することが可能になる。また、ワーズワスとコールリッジの作品内相互引喩については、既に Paul Magnuson, *Wordsworth & Coleridge* (1988)、Lucy Newlyn, *Coleridge, Wordsworth, and the Language of Allusion* (2001) など優れた先行研究があるものの、他の二人の作家もこれに加えることにより、さらに大きな枠組みで引喩の響き合いを捉え直すことができるはずだ。

(5) こうして、文学の制度的な大問題も視野に入れつつ、ロマン主義作家の具体的な作品に目を向けながらも、特定の一人を特権化することなく、ロマン主義第一世代に属する主要作家たちを群像として捉え直すことにより、作家と作品及びその時代の文学状況についてこれまで以上に重層的な解釈が可能になると予想される。それはまた、ニュークリティシズム的な歴史性の閑却と新歴史主義に代表される歴史性の恣意的な利用という両極端を行く批評の間に第三の道を切り開き、ロマン主義文学作品の持つ複雑さとその魅力を浮き彫りにするはずである。その結果、作品そのものを謙虚に読み味わうことよりも、自らの思想を盛り込むことに重きを置き、徒に難しい言辞を振り回して一般読者を遠ざけ、袋小路に陥った現代の文学批評を、開かれた前向きなものへと回帰させるきっかけになるものと期待される。

(6) さらに、力の及ぶ範囲で、こうした 18 世紀末から 19 世紀前半のイギリス・ロマン主義文学における友愛共同体と印刷文化という二つの公共圏の関係についての実証的考察を通じて、ユルゲン・ハーバーマスが現代哲学において期待を寄せる市民的公共圏及び公論の再生復権を考える際のモデルを提供し得る可能性についても示唆したい。

3. 研究の方法

(1) ロマン主義第一世代の詩人ウィリアム・ワーズワス、サミュエル・テイラー・コールリッジ、及び二人と密接な関わりのある散文作家チャールズ・ラム、トマス・ド・クイン

シーを主たる研究対象とし、コールリッジが軸となって構築を目指した友愛共同体とその挫折について、当時の作家たちの日記や書簡、詩などを精読し最新の研究成果を参照することによって、実態を明らかにする。その上で、印刷文化というさらに大きな公共圏で行なった活動の成果である定期刊行物への寄稿を中心とする作品を、特に、相互引喩や雑誌媒体での相互批評などに重点を置いて詳細に検討することによって、限定的な公共圏としての友愛共同体時代の影響関係がどのように持続し、あるいは断ち切られていくのかを探る。最後に、二つの公共圏に立脚したロマン主義第一世代の文学状況を俯瞰的に捉え、その文学が社会に与えた影響を歴史的な文脈の中で考察する。

(2) 研究目的を達成するために、まず、イギリス・ロマン主義時代の政治、社会の動き、海外進出の状況、出版界、世論、一般大衆の動向などの大きな流れを詳細に理解するために、歴史的研究の重要文献を閲読する。これは前回の科研費研究でも相当行ない準備は整っているが、新たな研究書が次々生まれているので、そうした成果を吸収する必要がある。近著からごく僅かを挙げるだけでも、スコットランドとイングランドの進歩的知識人の関係を公共圏の成立と絡めて考察する Alex Benichou, *Intellectual Politics and Cultural Conflict in the Romantic Period* (2010)、印刷文化の中心地でありラムの終生の住まいだったロマン主義時代のロンドンを精鋭の研究者たちが論じる James Chandler & Kevin Gilmartin, eds., *Romantic Metropolis: The Urban Scene of British Culture, 1780-1840* (2011)、ラムやド・クインシーの作品が雑誌に掲載される時代のロンドンの芸術と文化を下町庶民の冒険という観点から捉え直す Gregory Dart, *Metropolitan Art and Literature, 1810-1840: Cockney Adventures* (2012)、印刷文化を通じた大衆への共感の可能性と危険性を論じる Mary Fairclough, *The Romantic Crowd: Sympathy, Controversy and Print Culture* (2013) など、興味深い論考が目白押しで、精読してロマン主義作家が誕生する時代相をさらに明確に把握する。

(3) 次に、本研究の対象とするイギリス・ロマン主義の代表的作家が当時の社会状況の中でどのように生きていたかを知るために、作家についての伝記だけでなく本人たちが記した日記や書簡にも目を通し、特に青年期において、フランス革命の自由と平等の理想に期待して裏切られた後、ごく僅かな構成員からなる友愛共同体を構築しそれを活動の基盤にしようとしていたことを跡づける。そうした時期を経て、あるいは同時並行的に、当時の主要な書評・文学雑誌と主要な新聞に作家たちが寄稿した作品、あるいは書籍とし

て出版した作品を閲読し、その作品にどのような形で友愛共同体の相互影響の跡が見られるかを検証し、作家として自立する過程にはある種の協同作業的な面がある事を突き止める。こうした作業は、ラムを除く三人については以前の科研費研究でもかなりの程度行ない、日記・書簡、定期刊行物、書籍について扱っているが、さらにその対象範囲を広げ深める。他の三人に較べてこれまで取り組みが浅かったラムについては、特に重点的目標として力を入れる。

(4) 以上のような作業を経て、友愛共同体という狭い公共圏時代の相互関係を視野に入れつつ、印刷文化というはるかに広い公共圏に参入した作家としてのそれぞれの代表作を比較することによって、私圏に属する個人の資質や自己同一性のみならず、孤高の芸術家としてではなく、群像の中でそれぞれの作家像を捉え直し、最終的には、作家が天賦の才を花開かせようとする個人的な努力に加えて、少数の仲間だけからなる友愛共同体の中での相互関係、さらにはもっと広く、歴史的・社会的文脈などの影響を受けた複雑な経緯から生まれてくるものであることを明らかにし、イギリス・ロマン主義第一世代の文学状況を立体的に浮かび上がらせる。

4. 研究成果

(1) 2014 年度

イギリス・ロマン主義時代の政治、社会の動き、海外進出の状況、出版界、世論、一般大衆の動向などの大きな流れを詳細に理解するために、Alex Benchimo、Gregory Dart などによる最近の重要文献を閲読した。

イギリス・ロマン主義の代表的作家のうち、今年はワーズワス、コールリッジら湖水地方の詩人たちと深く交わった散文作家ラムを軸として、まず、その手紙や伝記を読み、他の作家との交友関係を精査して、友情による作家同士の共同体構築が作品生成に大きな影響を与えたことを確認した。

当時のロマン主義作家たちが青年期の相互交流で互いに刺激し合って創作を行ない、やがて投稿を行なったうちでも最も重要な文学雑誌 *London Magazine* に掲載された記事を閲読し、投稿を通して公的な印刷文化の中で地歩を固めていく過程を検証した。特に、ラムの寄稿がやがて 1823 年に単行本『エリア随筆正篇』*Essays of Elia* として出版される経緯を、友愛共同体からより公的な印刷共同体へと参入する発展の例として包括的な検証を行なった。

作家南條竹則氏と始めたエリア随筆の完訳詳註版作成の作業が予想以上の速度で進展し、全 4 巻計画の半分に当たる 2 冊を年度内に国書刊行会より刊行した。翻訳を南條氏が担当し、本研究者は全体の約半分を占める註釈と、上巻末に付したラムの伝記によって、友愛共同体から印刷共同体への発展過程を

明示する形で、イギリス散文の頂点であるこの随筆のロマン主義文学における重要性を詳説し、作品生成の背後にある友愛共同体の存在を意識することによって読解の可能性がさらに広がることを明らかにした。

(2) 2015 年度

イギリス・ロマン主義時代の社会の動き、海外進出の状況、出版界、世論などの流れを理解するために、Mark Parker, James Treadwell などによる最近の重要文献を閲読した。昨年までの正篇に続き、ラムの雑誌投稿エッセイをまとめて 1833 年に単行本化された『エリア随筆続篇』*The Last Essays of Elia* に焦点を移し、友愛共同体から印刷共同体へと参入する発展の例として包括的な検証を行なった。

それに基づいて、作家南條竹則氏との完訳詳註版作成の作業を今年も進め、昨年度の正篇 2 冊に続いて、3 巻目に当たる続篇上を刊行した。翻訳を南條氏が担当し、本研究者は全体の約半分を占める註釈と巻末に付した解説「チャールズ・ラムと距離の魅惑」によって、作品生成の背後にある友愛共同体の印刷共同体の存在を意識することで読解の可能性がさらに広がることを明らかにした。それに留まらず、ラムがロンドンを媒介にして William Blake と Charles Dickens をつなぎ、Charles Baudelaire, Virginia Woolf, Walter Benjamin などその後の都市文学の系譜の源流であることを突き止めた。

(3) 2016 年度

イギリス・ロマン主義時代の社会の動き、出版界、世論などの流れを理解するために、O'Leary, McFarland などによる重要文献を閲読した。引き続き、ラムの雑誌論文とそれをまとめたエリア随筆単行本続篇に注目し、今年はその後半に焦点を移し、友愛共同体から印刷共同体へと参入する実例として包括的な検証を行なった。

それに基づいて、作家南條竹則氏との完訳詳註版作成作業を進め、昨年度の続篇上巻に続いて最終巻に当たる続篇下の刊行を目指した。翻訳を南條氏が担当し、本研究者は、詳細な註釈とあとがき解説をほぼ書き終え、出版する準備は整っていたが、残念ながら、訳者及び出版社の都合により年度内の出版は果たせなかった。

(4) 2017 年度

昨年度中に出版準備がほぼ整っていた作家南條竹則氏と完訳版作成の共同作業を続け、5 月上旬に最終刊第 4 巻続篇下を出版した。本研究代表者は、先行研究を隈なく参照して書籍全体の半分に相当する詳細な註釈を執筆したほか、Courtney, Monsman, Aaron ほか優れた先行研究を精読して、あとがき解説「虚実緋い交ぜの織物」を書き、作品生成の背後にある友愛共同体と印刷文化

の重要性を明らかにした。

ラムなどの同時代人で、当時出版界で活躍しながらその後埋もれて、主要な6人の詩人と比べて評価に大きな格差が生じた男性詩人 George Crabbe, Walter Savage Landor, Thomas Lovell Beddoes の3名が20世紀の詩人 Ezra Pound によって高く評価された事実について印刷文化との関わりで考察し、「Ezra Pound とロマン主義の『別の伝統』」と題して、11月の日本エズラ・パウンド協会大会のシンポジウムでパネリストとして発表を行なった。

3月には英国図書館でロマン主義時代の各種文献を閲読し、虚実の微妙な境界線上を渡り歩いて読者を出し抜こうと意図したラムが生み出したエリアは、作者の心情の吐露として真正直に受け止めるだけでは真価を捉え難い極めて現代的なテキストであることを突き止めた。2018年3月末までにその研究成果を4年間の集大成として、論文「チャールズ・ラム『エリア随筆』と韜晦（ミスティフィケーション）事実と虚構の狭間」にまとめ、『ノンフィクションの英米文学』（金星堂から刊行予定）の寄稿締め切りに間に合わせた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 1 件)

藤巻 明、チャールズ・ラム『エリア随筆』と韜晦（ミスティフィケーション）事実と虚構の狭間、ノンフィクションの英米文学（金星堂）査読無、2018（予定）34-49（予定）

〔学会発表〕(計 1 件)

藤巻 明、Ezra Pound とロマン主義の「別の伝統」、日本エズラ・パウンド協会、2017

〔図書〕(計 4 件)

チャールズ・ラム、南條竹則、藤巻 明、国書刊行会、完訳・エリア随筆 IV、2017、352

チャールズ・ラム、南條竹則、藤巻 明、国書刊行会、完訳・エリア随筆 III、2016、298

チャールズ・ラム、南條竹則、藤巻 明、国書刊行会、完訳・エリア随筆 II、2014、276

チャールズ・ラム、南條竹則、藤巻 明、国書刊行会、完訳・エリア随筆 I、2014、344

〔その他〕

ホームページ等

<http://univdb.rikkyo.ac.jp/view?l=ja&u=342&n=%E8%97%A4%E5%B7%BB&sm=name&sl=ja&sp=1>

6. 研究組織

(1)研究代表者

藤巻 明 (FUJIMAKI, Akira)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：30238604